

成人向
FOR ADULT ONLY

自習中は
静かに
寮長

裸の王子の反省





「ラストっ！」

空手着姿の芸能人以上に整った美しい顔の少年が、長い脚で軽快なステップを踏みながらそう叫んだ次の瞬間には、豪快な回し蹴りがありえない高速でキックミットに炸裂した。

ドカンっ！としか表現しようのない衝撃音が武道場に響き渡り、キックミットを構えた空手着の少年の体が宙に浮く。

「ごめんな、ちよつと本気を出し過ぎたね」

乱れた空手着を直しながら、まったく悪いと思っていない笑顔で笑う少年に、言われた少年はキックミットを抱いたまま突っ込む。

「いやいや！絶対コロすつもりだっただろ！」

「はははっ！」

爽やかに笑うイケメン。

「否定しないし！」

キックミットの少年は突っ込みを入れてから肩を竦める。

「まあいいや、さっさと掃除してあがろうぜ？」

「ああ、そうしよう。今日は居残りに付き合ってくれて助かったよ」

「おう。でもほんと、お前って稽古は好きだよな」

「…うん、稽古はね」

イケメン少年は苦笑しながら頷いた。

新入生もそろそろ学校に慣れてくる四月中旬、箭学園東海校のキャンパスにある中部空手部道場で居残り稽古をしていた二人は、簡単に道場を清掃してからシャワー室に向かった。

「なあカイト、やっぱり次の大会にもエントリーしないのか？」

「うん、しないよ。シユンはするんだろ？」

カイトと呼ばれたイケメン少年の即答に、シユンと呼ばれた少年は『駒沢』と書かれたゼッケンの付いた空手着を脱いだため息をつく。

「するだろ普通。空手部なんだから。なんでお前はしないんだよ？」

「興味がない」

カイトは『榊』と書かれたゼッケンの付いた空手着を脱ぎながらそっけなく答える。

「でもさあ、我が箭学園東海校中部空手部で一番強いお前が出なくてどうするんだよ！俺らはまだ二年生になったばかりなのに、三年生全員を子ども扱いって相当だぞ？マジでテッペン獲れるだろ！サカキカイトの名前を全国に轟かそうとか思わないのか？」

「うん、まったくないね」

あつさり答えてから、カイトは思い出したように付け加える。

「あ、でも、別に『壮絶な過去』とか『衝撃の秘密』みたいなのは無いから。自分が強くなるのも、誰かと戦うのも好きだけど、段取りとかルールとかシステマチックに扱われると興ざめして面倒になるし、一番になって目立ちたいのかも全くない。むしろ目立ちたくない」

今まで散々聞かれてきたのか回答文が完成している。

「…はいはい、わかりました。まあ、確かに今でもこの東海校キャンパスでは知らない人間はいないくらい目立っているけどね」

全裸のカイトを舐めるように見て、シユンは納得するように頷く。

箭学園東海校の中部二年生で空手部の榊威斗は、初等部の頃から、そのアイドルを凌駕する顔と、完璧な造形の筋肉に覆われた手足の長い均整の取れた肢体で、中部部はもちろん、初等部と高等部にもファンがいる東海校キャンパスのアイドルだ。

だからこそ、大会に出ないという我が儘もまかり通るのだ。

「ま、それでも我らが王子様のチンポを見られるのは寮生以外じゃ俺ら部活仲間だから役得役得！」

シユンはそう茶化して、カイトの中学生らしいボリュームの柔らかい陰毛に飾られた、体格の割には立派なズル剥けペニスと陰囊を見る。

「ばっか」

カイトは笑って駒沢を蹴りつけた。



「そういえば、この際だから聞いてちょうけど」
シュンはシャワーブースから身を乗り出して、シャワーを浴びているカイトに声をかける。

「ん？なに？」

「お前くらいイケメンなら、箭アーツから誘われているだろ？エロ動画とか出さないのか？っていうか出してないよな？」

箭アーツとは、箭学園の児童生徒なら全員が知っている箭学園内で公認の互助組織で、現在では巨大な箭学園グループ全体で、男の子の肉体を性的に収益化して本人に還元する事業を展開している。

簡単に言えば、学園公認で生徒がヌードや性行為を売れる仕組みだ。

「ああ、小学生の頃から何度も誘われてるけど、特に金に困ってはいないから全部断ってるよ」

「やっぱそうか。そっちも、モツタイナイ話だよな」

シュンはそう言うてから、ブース越しに、背中を向けているカイトの腰と尻に手を当てる撫でまわした。

「こんなにエロい肉体なんだから有効活用しなきゃ！お前のエロ動画なら俺は全部買うぜ？っていうか正直、欲しい」

茶化した風を装っているが、声音に本気が滲みでいるシュンは、頬を赤らめながらカイトの肉体を見つめている。

そして、カイトの反応が無いまま一呼吸開いてしまい、途端にシュンは焦った顔で目を泳がせた。

冗談を装ったのに、ドン引きされたかと慌てたのだ。

だが、振り向いたカイトの顔は完全に平常運転だった。間が空いたのはシャワーを最後まで終えるためだった感じだ。

「本物が目の前にいるのに、動画なんかいらねえだろ」

「えっ？」

「男同士で友達なんだからチンポなんかいつでも見せてやるし、射精が見たければ見せてやるよ。あと、夜のオカズにしたいならスマホで写

真でも動画でも好きなだけ撮っていいぞ？」

「マジで！」

あまりに平然とした顔で凄いことを言うカイトに、シュンは生唾を飲みこんでからカイトの腰と尻を掴む手に力を入れる。

「：なあ、先輩達とセックスしてるって噂はひよっとして」

「ああ、してるぜ？でも淫乱つてのはフェイクだぞ。オレから誘ったことは一度もないから。誘われたら基本的に断らないだけで」

「どうしてそんな？誰とでも？」

驚愕するシュンにカイトは不思議そうに首を傾げる。

「うん？いや、さすがに誰とでもじゃないな。オレにとつて男同士のセックスは空手の組手と同じだからな。気心が知れた、楽しくて気持ちいい相手とだけだよ」

そこまで言うてから、カイトは何か気付いてシュンの目を見た。

「：シュンもオレを抱きたいのか？」

シュンは泣きそうな顔でコクコクと頷く。

「早く言えば良かったのに。もちろん良いぜ。オレの部屋にくるか？」

「いや、もうチンポが爆発しそう。このまましたい」

切羽詰まったシュンの言葉に、カイトは笑って頷いた。

「カイト、俺、もう！」

カイトのシャワーブースに転がり込んできたシュンは、背後からカイトの腰を抱くと完全勃起したペニスをカイトのアナルに押し付けた。

「いいぜ、オレは大丈夫だから、そのまま俺のアナルにぶち込め！」

「カイトお！」

シュンは左手でカイトのペニスを握ると、叫びながらカイトのアナルにペニスを突っ込み、ほぼ同時に激しく射精した。

「ははっ！熱いね！まだイケるだろ？俺の部屋で朝までやろうぜ」

カイトは余裕の表情で楽しそうに笑った。



「この辺のはずだけど…」

カイトは部活後にシャワーを浴び、ジャージのパンツにTシャツと
いうラフな姿で初等部の総合体育館の前にいた。

「こっちこっち！」

タンクトップにショートパンツの男子小学生が、総合体育館の通用
口から大きく手を振って手招きしていた。

そして、カイトが男子小学生に連れ込まれたのは、筍学園東海校初等
部の総合体育館に付属している体育用具室だった。

「…なるほど、ここなら」

カイトは苦笑気味に笑う。

空手部の仲間と同級生のシュンに、朝まで食べるように抱かれてやっ
てから三日後に、今度は初等部の男子児童に呼び出されていたのだ。

呼び出したのは、初等部の空手倶楽部時代からなぜか懐かれている、
三つ下の平川周平だ。

カイトとシュウヘイは積み上げたマットレスに並んで座ると、お互
いの近況報告などたわいもない会話を数分してから、シュウヘイが意
を決して本題を切り出した。

「カイトくん、おれ、チンチンから白いねばねばだよ！」

得意げに報告する小学生男子は、スマホの画面をカイトに見せる。

「コレ証拠写真。朝起きたらパンツの中ねちよねちよだった」

スマホ画面には、履いたままのボクサーブリーフを広げて撮影した、
精液らしい粘液で濡れた下着と男児のペニスが表示されていた。

それを見たカイトは優しい笑顔で男の子の頭を撫でてやる。

「ああ、確かにそうみたいだね。ついに出了か。良かったな、コレでシ
ュウヘイもオトコになった」

「うん！」

シュウヘイは嬉しそうに大きく頷く。

そして、上目遣いでカイトを見ながら、期待と不安に満ちた表情と声

でカイトに訴えた。

「ねえ、約束、覚えてるよね？」

「約束？何かあったか？」

カイトはワザとらしく、大げさにとぼけて見せる。

「もうっ！約束したじゃん！おれが精通したらカイトくんのチンチ
ン見せてくれるって！それからオナニー見せて教えてくれるって！」

カイトをポコポコと叩きながらシュウヘイは怒る。

「ははっ！冗談だっ！覚えてるよ、もちろん」

カイトはシュウヘイの拳を両手で受け止めながら笑う。

それからおもむろに立ち上がり、自分でジャージを下着ごと下ろし
て通常状態の萎えチンポを丸出しにする。

「ほら、お望みのチンポ。触ってもいいよ」

カイトの柔らかな陰毛に飾られた、立派なズル剥けペニスと陰囊を
目の前に差し出されたシュウヘイは目を丸くして生唾を飲みこむ。

「…すげえ」

そう呟いてから、右手でカイトのペニスを、左手で陰囊を掴んだ。

「熱くて重くて手触りが最高に気持ちいいっ」

夢中でカイトの性器を撫でまわし、感嘆の声を上げるシュウヘイの
手の中で、カイトのズル剥けペニスは勃起していく。

「じゃあ、約束通りオナニーを見せてあげるよ。そのまま射精するから
精液がかからないように上手く避けて」

カイトはそう言うと、自分のTシャツの裾をめくりあげて口に銜え
て腹と胸を剥き出しにし、右手でジャージのパンツを抑え、それから左
手で自らのズル剥け勃起ペニスを扱き始めた。

「うおおっ」

シュウヘイは、カイトの匂いが届く距離で始まった公開オナニーに
息を呑み、目を見開いた。

形の良い大胸筋に乗った、尖ったエロい乳首が呼吸に合わせて上下



し、綺麗に割れた腹のシックスパックが艶めかしく蠢く。

さらにその下では、デカくて長い勃起したズル剥けペニスがりズミカルに扱かれていて、ピンク色の亀頭の先から透明な粘液が零れだしてクチュクチュと卑猥な音が体育用具室に響き渡っている。

「これがオナニー…」

シュウヘイはうわ言のように眩きながら、まばたきする時間すら惜しむように目を見開いて、カイトの痴態を見詰めた。

「…っ！」

暫くして、カイトが息を詰めてキュツと腹筋が締まると同時に、剥き出しの亀頭の先の尿道口から、白い粘液が噴き出す！

「うわっ！」

シュウヘイはおもわず右手でカイトの精液を受け止めた。

「ああ、上手く受けたね」

Tシャツを口から放したカイトは爽やかに笑う。

「これが、カイトくんのせーえき…」

自分の手のひらを見てシュウヘイは目を輝かせ、カイトの精液の感触を確かめたり匂いを嗅いだりして表情をコロコロ変えている。

「うーん、さすがにちよつと恥ずかしいかな」

カイトはそう言って苦笑しながらシュウヘイの頭をポンポンと叩き、そのまま頭を掴むと、腰をかがめてシュウヘイの目を覗き込む。

そして、魅惑的な笑みを浮かべてシュウヘイに囁きかけた。

「…で、この後はどうしたい？」

「えっ…？」

明らかに動揺しまくっているシュウヘイの股間ではショートパンツが盛り上がりテントを作っている。

「シュウヘイが良ければ、オレとセックスしてみるかい？」

「ええっ、それって、その、つまり…」

顔を真っ赤にして言葉が出ないシュウヘイの股間のテントを、カイトは驚掴みにする。

「あんっ！」

それから、シュウヘイの耳元で再び囁く。

「オトコだろ、腹をくくれ。やりたい事を正直に言いな」

カイトの言葉でシュウヘイは意を決すると、真っ赤な顔でまっすぐカイトの目を見てハッキリと口に出す。

「…おれ、カイトくんとセックスしたい！おれのチンチンを、…カイトくんのお尻に入れてシャセイしたい！」

がんばったシュウヘイを、カイトはやさしく抱き寄せた。

「たいへんよくできました！うん、いいよ。セックスしよう」

そしてシュウヘイのおでこに軽くキスをすると、体勢を変える。

屈んで低い跳び箱に両手をつき、剥き出しのままだった尻をシュウヘイに差し出した。

さらに、クイツと腰を上げてアナルをシュウヘイに見せつける。

「あっ…！」

シュウヘイは、カイトの桃色で花の蕾のように綺麗なアナルが、呼吸に合わせてクパクパと艶めかしく開閉する様子を見て生唾を呑む。

「さすがにアナルは初めて見せたよね。もう準備は出来てる。今は、シュウヘイのチンポを入れてもらうための穴だよ」

「カイトくん！」

シュウヘイは自分のショートパンツを下着ごと引きずり落とすと、ポンと跳ね出た完全勃起した包茎をカイトのアナルに押し付け、そのまま一気に挿入する！

「ああっ！出るウっ」

直後に、シュウヘイの絶叫が体育用具室に響きわたった。

「よし、射精しても勃起したままだね。そのままもう一発出そう！」

カイトは余裕の笑みでシュウヘイに命じた。



「あ、やっちゃった」

学生寮にある大浴場の脱衣所で、風呂上りに脱衣かごの中を見てカイトは小さく舌打ちする。

着替えを丸ごと自室に置き忘れたことに気付いたのだ。

自室を出る前にはちゃんと下着とスウェットを用意していたのだが、出がけにスマホが鳴ったせいだろう、丸々置いてきてしまっていた。

さらに今日に限って、着てきた服は下着も含めて全て洗濯機に放り込んでしまっていて、端的に言って着るものが無い。

「まあ、いいか」

カイトはハンドタオルを肩にかけて、全裸のまま脱衣所を出て自室に向かつて廊下を歩きだす。

同じ学校の男子学生しかいないとはいえ、学生寮の廊下は共用空間なので、そこを全裸で闊歩することは通常あり得ない。が、実際には様々な理由で全裸のままうろつく学生はたまにいるのだ。

ただ、大浴場から中等部生徒の部屋がある棟までは一番距離があり、かなり長々と全裸で寮内を歩くことになる。

「よう！セクシーじゃん！」

通りすがりの先輩が、カイトのチンポを掴んで揉んでいく。

「どうも」

カイトはチンポを触られても平然と受け入れて生返事を返すだけだ。ただその後も、ちよつと多くの部活や補習が終わる時間帯のため、カイトは次から次へと他の寮生達に全裸で出会ってしまう。

「…うくん、ちよつと失敗だったか」

さすがにカイトも後悔したが、今さら引き返せないので開き直ってそのまま堂々と歩く。

出会った大半の寮生達は事情を察して笑うだけだが、少なくとも人数の寮生がカイトの肉体を弄っていく。しかも同学年や先輩はもちろん後輩の中等部一年生達も喜んで触るのだ。

一番人気はチンポ、二番人気は尻、三番人気は乳首、四番人気は腹筋とヘソ、みんな遠慮なく触っていく。

あくまで冗談としての弄りなので、カイトも目くじらを立てるわけにもいかず好きに触らせていたが、アナルに指を突っ込んできた初等部五年生にはガチめの鉄拳制裁を加えた。

そしてようやく自室のある棟まで辿り着いたところで、背後から背中を叩かれた。

「ホントにいたな、裸の王子様」

振り向くと、空手部の先輩で高等部二年生の梶本健次郎だった。

プリントTシャツにジャージというラフな格好で、股間には大きなテントが張っているのを隠そうともしていない。

「なんでですか王子様って」

「知らないのか？お前、寮生達の間じゃウチの寮の王子様って呼ばれてるんだぞ？入寮当初からさ」

「…マジで？」

カイトは本当に知らなかった。そんな恥ずかしい扱いだっただとは。「マジマジ。全学年通して一番のセックスシンボルだぜお前は。で、その王子様が全裸で練り歩いてるって聞いて飛んできた」

「練り歩きって…。ただ着替えを忘れただけです」

不満を隠さずに言うカイトの態度もスルーして、健次郎はカイトの背中当っていた右手をカイトの腰に回して自分の体に引き寄せる。

すると、ジャージ越しにもハッキリわかる勃起ペニス。カイトの剥き出しの尻に当たった。

「なあカイト。駒沢に抱かれたんだって？俺にも抱かせろよ」

健次郎はさらに左手でカイトのペニスを弄りながら要求する。

「先輩ならいいですよ？」

あっさり受け入れるカイトに健次郎は驚いて目を丸くする。「ただし、オレ、淫乱じゃないですから。誰でも良いワケじゃなくて、



ちゃんと気心の知れてる相手なら、組手と同じで楽しいってだけで。そこは間違えないで欲しいです」

「…ああ、わかった」

健次郎は何か言いたそうだったが、言葉を飲み込んで頷いた。

「…デカイですねえ」

そのまま健次郎の部屋に連れ込まれたカイトは、あつという間に全裸になった健次郎の股間を見て素直に驚いた。

完全勃起して天を衝くズル剥けのペニスは、まさに『巨根』という単語がふさわしいイチモツだったのだ。

「まあな！少なくとも、この寮では一番だ」

ニヤリと笑った健次郎は、カイトの腕を取って少しだけ強引に引き寄せて、抱きしめる。

そして、全裸の肉体同士を密着させて、完全勃起して熱く硬い自分のズル剥けペニスをカイトの下腹に押し付けた。

「んあっ」

熱い肉棒の感触にカイトは頬を染め生唾を飲み込む。

そんなカイトの反応に、健次郎は満足そうな顔でカイトの目を見る。

「へへっ、コイツをお前のアナルから根本までぶち込んで、腹の一番奥でびゅうーびゅうーと射精してやるからな」

「…楽しみだけど、ちょっと怖いな」

カイトは健次郎をまっすぐ見つめ返ししながら、魅惑的に微笑む。

「安心しろ、たろっぷり時間をかけて、じっくり解してからな」

そう言いながら、健次郎はカイトをベッドに押し倒す。

「まずはお前のエロい肉体を隅々まで嘗め回してたろっぷり味わう。その後でアナルを鷲の一本一本までじっくり舐め解してやるからな」

最高にグスイ顔で宣言する健次郎にカイトは啞然とするが、すぐに苦笑気味に笑った。

「まいったな、オレすごい変態にガツガツと貪り食われちゃうんだね」

「いまさら嫌だと言っても逃がさないぜ？」

「言わないよ。いいよ、オレのカラダ、喰わせてやるよ」

カイトは蠱惑的な笑みを浮かべてペロリと舌なめずりをした。

「せんばいつ、降参です！もう勘弁して」

カイトは息も絶え絶えに降参を宣言する。

健次郎のベッドでセックスを始めてから既に小一時間、カイトは延々と全身を愛撫され続け、現在は仰向けのまま両足を自分で抱えて天に晒したアナルを、舌と指で執拗に舐め犯されていた。

しかも、まだ一度も射精を許されていない。

もう何回も、絶妙なタイミングで健次郎に射精を阻止されていて、さすがに余裕が無くなっている。

「ええ？しよ？がないなあ。カイトくんはこらえ性が無いなあ？淫乱じゃないの？あんなにエロエロに啖呵を切ったのになあ？」

そう言っただけニヤニヤ笑う健次郎に、カイトは逆ギレする。

「ああもう！調子こいてすいませんでした！オレは淫乱ってことで良いですから先輩のデカチンでブチ犯してください！」

健次郎は全面降伏したカイトに満足げに頷くと、ベッドに座り直して仰向けになり、完全勃起したズル剥けペニスを天に向けた。

「ほら来いよ。背面でだ。そのほうがエグイ角度でドつけるからな」

カイトは命じられるままに、健次郎に背を向ける体勢で肉棒を跨ぐ。

「…っんあ」

そして、アナルに健次郎の熱い亀頭を押し当て快感に身震いする。

健次郎はカイトの左腕を掴み、右手でカイトの右乳首を強く摘まむと、何も言わずいきなりアナルを肉棒で貫いた！

「っんあああんっ！」

アへ顔での嬌声と同時に、カイトは尿道口から激しく射精した！



「よっし！」

小柄な少年がガッツポーズを決める。

同時に、もう一人の小学生と中学生くらいの少年が歓喜の声をあげて小柄な少年の頭や肩を叩いて乱暴に祝福した。

「マジか。こんなにあっさり負けるとは思ってたなかつた」

カイトは呆然とゲーム画面を見つめている。

「だって俺ら、今日のためにめっちゃ練習したもん！」

得意げに笑う少年達三人に、カイトは軽くバンザイをして苦笑する。

「降参だよ。もちろん約束は守るよ」

少年達はさらにワツと歓喜を爆発させた。

空手部の先輩でもある梶本健次郎に、寮の部屋で朝まで抱き潰された日以降、激しいセックスの音がだだ洩れだったせいで寮内に噂が広まってしまい、カイトにセックスを要求する寮生が激増した。

しかし、カイトは空手部のシャワー室で駒沢に語った通りに、気心が知れた友人・知人に求められれば断らずに自分のカラダを与えたが、それ以外の初等部から高等部まで四百人以上いる寮生の大半は、名前も知らない仲なので丁寧に説明してはつきり断っていた。

それでも執拗に何度も求めてくる寮生は複数いたが、この三人は少し風変わりで、三人セットで『エロいカラダで遊びたい』と求めてきて、何度断っても手を変え品を変えアプローチしてきた。

そして今日は、風呂上がりのカイトを待ち伏せて捕まえて、対戦型ゲームで勝ったら一晩『遊ばせて』くれ、負けたら一回千円払う、と持ち掛けてきた。

ゲームに自信があるカイトは面白がって勝負を受けて立ち、空いていた寮の自習室で対戦したら、超簡単に負けてしまったのだった。

「人数が多いから部屋じゃ狭いよね。ちよつど良いからココで遊ぼう」カイトはそう言うと、あつという間に着ていたスウェットの上とアンダーを脱いで全裸になり、自習室にあったローテーブルに乗る。

「ほら、オレのカラダで遊ぶんだろ？好きにしていよいよ？」

両手を頭の後ろで組んだ全裸のカイトが、そう言って少しだけ照れ気味に笑うと、三人組はポカンとした間抜け面を晒して固まる。

しかし、三人はすぐに我に返ると、慌ててお互いに頷き合ってから、大急ぎで自分達も全裸になつて包茎な勃起ペニスを晒す。

カイトだけ全裸にさせるわけにはいかない、と思つたらしい。

基本的に悪い奴らではないのだ。

「：三人とも、オレのカラダで遊んだ後は、部屋のベッドで、ちゃんとしたセックスをしよう」

カイトにそう言ってもらえた三人の少年達は、心底嬉しそうな笑顔で強く頷くと一瞬だけ遠慮がちに、でもすぐにガツガツと、カイトの肉体で喰いたい部位に喰らいついた。

まずは首謀者でゲームに勝つた、小学生によく間違えられる小柄な少年で中等部一年生の田所アキラは、萎えチンでも十分立派なカイトのズル剥けペニスを両手で掴む。

「あつ、もう勃つてきた」

すぐに硬度を増して立ち上がっていくペニスを右手で感じながら、充実していく剥き出しの亀頭の尿道口を興奮気味に弄る。

もう一人の中等部一年生で、三人で一番背の高い黒井タクヤは、形の良い大胸筋と乳首にご執心で、カイトの雄っぱいを揉みしだき、乳首を摘まんで揉んでいる。

三人目の初等部五年生でいかにも幼い顔の倉田タカミチは、カイトの桃色で花の蕾のように綺麗なアナルを広げて恍惚としている。

ちなみに、着替えを忘れて全裸で廊下を歩いた際に、アナルに指を突っ込んでカイトに鉄拳制裁されたのもこの少年だ。

三人が夢にまで見た肉体を堪能していると、三人の闖入者が現れた。「ソコまでだあ！」



声を荒げて自習室に乱入してきたのは。カイトがシャワー室で抱かれた同級生のシュンに、筆おろしをしてやった初等部のシュウヘイ、そして朝まで抱き潰された高等部二年生の健次郎の三人だった。

しかも、三人とも手にバットや竹刀等のエモノを持っている。

「お前ら、ついにカイトに手を出したな！もう許さねえっ！」

ドスの効いた健次郎の怒声に、シュンとシュウヘイも被せて怒鳴る。

「何度もしつこく付き纏いやがって！」

「ムカつくっ！ぶっコロす！」

明らかに様子がおかしい健次郎達に、カイトは慌てて説明する。

「待って！違うんだ。今回はちゃんと同意の上で遊んでるんだ！」

カイトの説明に、健次郎達の顔がさらに険しくなる。

「…だったら、よけいにヤダ」

シュウヘイの闇落ちしたかのような声に、カイトは自分の根本的な間違いに気づいて全身の血の気が引く音を聞いた気がした。

同時に、急変した事態を飲み込めずに固まっていたアキラ達三人は、ようやく状況のヤバさに気付いて動揺する。

「ま、待て、待ってくれ！俺達はそういうつもりじゃ…っうああ」

前に出て釈明しようとするアキラに、シュンがバットで殴りかかり、シュウヘイと健次郎もそれぞれのエモノで他の二人に襲い掛かった。

「馬鹿っ！やめろお！」

叫ぶカイトに構わず、シュン達は全裸の少年三人を追い回してバットや竹刀でめった打ちにしている。

一応、ギリギリの手加減はしているようだが、いつ深刻なダメージを与えてしまうかわからない激しさだった。

「…つく、お前らいい加減にしろ！」

カイトはシュウヘイの首根っこを掴んで投げ飛ばし、並んでいたシュンと健次郎には背後からタックルをかける。

「逃げる！逃げてくれ！」

そしてシュンと健次郎を組み敷いたカイトがそう叫ぶと、アキラ達はカイトの目を見て無言で頷き、そのまま自習室から逃げ出した。

大きく息を吐いたカイトがシュンと健次郎を解放すると、立ち上がったシュンは泣きそうな顔で叫ぶ。

「いい加減にしろは俺達のセリフだ！俺達の気持ちも知らないで、次から次へとオトコを食い散らかしやがって！」

そう叫んでからシュンは全裸になり、健次郎とシュウヘイも強く頷くと、無言で全裸になる。

股間で完全勃起したペニス为天を衝いた三人は、呆然とした表情で立ちすくむ全裸のカイトを自習室の床に押し倒し、犯した。

「んああっ！」

床に寝転んだ健次郎の硬く屹立した巨根に、アナルを真上から落とされて、腹の中に乱暴に熱い肉棒を打ち込まれたカイトは悶絶する。

同時に、喘ぐカイトの口元にシュンの肉棒が押し付けられ、さらにシュウヘイの包茎ペニスも反対側から押し付けられ、カイトは両手と口で必死に奉仕し始める。

カイトがシュン達三人に輪姦されはじめてから既に二時間以上が経過し、カイトの腹には三人合計で十発の精液が注ぎ込まれていた。

三人は無言でカイトを犯し続け、カイトも一切抵抗せずに、冷たい床の上でされるがままに犯されている。

そして、合わせて十三発目の精液がカイトの口と腹に注ぎこまれた。

「…っん」

シュンとシュウヘイの精液を飲み込んだカイトは、小さく呟く。

「…そろそろ、気は済んだかい」

次の瞬間、カイトは健次郎を跨いで一気に立ち上がり、開いたアナルから精液が流れ落ちるのも構わずにシュンとシュウヘイの鳩尾を同時に肘うちし、さらに健次郎の鳩尾に右の拳を振り下ろした。



「やっぱり、オレが全部悪いんだろうな……」

カイトは自習室の椅子に全裸のまま浅く座り、頬杖をついて呟く。カイトの足元には、あっという間に制圧したシュン達三人が気を失って倒れている。

その気になれば、高等部二年生の健次郎も含めて、簡単に倒せる実力差があったが、せめてもの誠意で気が済むまで犯されてやったのだ。

彼らは気心のしれた仲間で友人のつもりだったが、彼らはそれ以上を自分に求めているのを、迂闊にもまったく気づいていなかった事に、カイトはショックを受けていた。

「……まあ、気付いても応えられなかったけどね」

カイトにとって、セックスは本当にスポーツのような感覚で、いわゆる恋愛感情の類はリンクしていない。

「でも、それじゃダメなんだね」

真つ暗な窓ガラスに映った自分の肉体を見てため息をつく。

勃起したズル剥けペニスを下腹に乗せたままで大股を開いて座る肉体は、自分自身でもエロくて卑猥だと思う。

この肉体で気心の知れた仲間達が喜んでくれるなら、どんどん使って楽しもうと思っただけだったが、その考え方が、結局は皆を傷つけてしまった事実を認めざるを得なかった。

「……どこまで騒ぎになってるかな。なんとかオレが納めないと」

そうは呟いてみたが、カイトには予感があった。襲われたアキラ達はまだ誰にも言わずに待っていてくれると。

下手に騒ぐとカイトの立場が危うくなると気遣っているはずだ。

「まずはアキラ達にちゃんと全部話して、シュン達のことを許してもらおう。そのうえで望まれば約束どおり三人とセックスしよう」

そして、その後はすぐに自分はこの学校から去ろう。

次の学校では、誰とも関らずに目立たないようにする。

そう決心したカイトは、自習室を出てアキラの部屋に向かった。

「大怪我じゃなくてよかった。そして本当にありがとう」

幸いにも、アキラ達はやはり軽い打撲程度で済んでいて、まだ誰にも言わず待っていてくれた。

そしてこのまま事件にしない約束もしてくれた。

「まあ気持ちは分かるし。……でも、オレらが黙ってても転校はするの？」

アキラは残念そうにカイトの目を見る。

「こうなった以上、元には戻れないからね。オレがいる限りアイツらは苦しむし、寮や空手部にも迷惑が掛かるから」

「そうかあ。めっちゃ残念。せつかくセックスできる仲間になったのに」

「そのかわり、今晚はどんなプレイでもしてあげるよ」

「マジで！ やった！」

アキラはすごく悪い顔で笑う。

「……アレ？ 早まったかな？ えっ？ えっ……」

アキラとタクヤ、そしてタカミチの三人と、一晩ずつ超マニアックな凄惨なセックスをさせられた三日間の翌日、カイトは学校を去った。

シュンとシュウヘイ、そして健次郎にはラインで別れを告げた。

直接会うと辛すぎるくらいには、大事な友人だったのだ。

カイトの転校先は、同じ系列校で筒学園の本校の中等部に決まった。

そこでカイトは、はるかに大きな騒動に巻き込まれ、想像を絶する過酷な性的経験をすることになるのだが、その物語はまた次の機会に。

自習中は
静かに
寮長



みなさんお久しぶりです！お元気ですか？
イラスト担当の筍屋です
まさかコロが3年たっても終息しないとは！
暗いニュースばかりで元気でませんねえ
今回 家庭の事情等もあり いつもにまして
薄い薄い本となってしまいましたが
どれか一枚でもお気に入り頂けたら幸いです♪
暑い日が続きますが皆様のご健康をお祈りしつつ
2022年8月
イラスト担当 筍屋

はじめまして&おひさしぶりです。
へたれ文字書きのた〜んけーです m(_ _)m
実は、今回の本は、
本来予定していた本のスピンオフ的内容です。
具体的には、主人公の前日譚になります。
2行くらいで書いた内容をガッツリ描きました。
そんなワケで、そう遠くないうちに本編も出る、はず！
まあ、結局は筋肉少年をいかに脱がせて鬪るかですが！
どこか一場面でも、皆さんの琴線に触れられたら幸いです。
2022年8月
文章担当 た〜んけー

裸の王子の反省

2022年8月13日 初版発行
発行/筍御飯VF
著者/筍屋&た〜んけー
印刷所/株式会社 プロス
連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp



